

町史外宿谷氏の賦〔宿谷氏の賦〕より。原文は「あゆみ」第5号（昭和54年）

山口 満

一、前書きのこと

武蔵七党の一つ、児玉党より端を発する宿谷氏に関しては、長年の懸案であった毛呂山町史に詳述されているので、今更、筆者が述べるまでもないと思われるし何となくおこがましくも感じられるのだが……。

町史は、あくまでも毛呂山町の正史で永遠に受け継がれることと思われ又、受継がれなければならないが、宿谷氏に関しては町史に記述されている以外にいくつかの事績が語り伝えられているので、町史の外史的な立場から、主として云い伝えを中心に若干の私考を折込み、又、今年のNHK大河ドラマ「草もえる」と同時代に活躍した宿谷氏にスポットをあててみた。云い伝えについては私の祖父、及び、宿谷氏祖母から伝え聞いたもので、町史とは若干の矛盾があると思われるが、地元の云い伝えは云い伝えとして、後世に伝えられてもそれなりの意味があると思われるし、そこには宿谷氏累代のゆかりある過去の人達のはかないロマンが流れて居ると思いつ稿を起した訳である。

始めにお断りしておくが、決して町史に反論するつもりはないので、町史を読んで参考にしていたごく程度のものである。

二、宿谷氏出自と系図の事

宿谷氏の出自に関しては、すでに町史に記述の通り、武蔵七党中、児玉党より起っていることが明らかであるが、宿谷氏の系図書に関して町史は、大谷木本、葛貫本、浅羽本、を参照して記述されて居られるが、この内、大谷木本、葛貫本は、江戸時代中期（元文中）宿谷氏一門によって、原本、武蔵国藤原姓児玉流宿谷氏系図より、それぞれ分写されたものと云い伝えられている（この時の立合人が私の六代前の久左衛門）。〔久左衛門は天保十四年（一八四三）十一月没〕

この原本は、宿谷氏宗家と呼ばれる、宿谷義夫氏家（大正頃廃家、末孫北海道）に、一口の黄金作りの太刀、一幅のまんだらとともに秘蔵されていたものであると云い伝えられている。

浅羽本に関しては、城山城主、浅羽宿谷氏の古屋敷（葛貫）をあずかっていた旧臣、福田の太郎の子孫が長くあづかり保存していたもので、明治初年、旧主家、葛貫宿谷氏に返上されたものといわれる。あゆみ四号〔昭和五十三年〕に、村本先生〔毛呂山町史編さん委員長、村本達郎氏〕が「まぼろしの郷土史料を探す」の中に、宿谷氏系図について「日蓮教団全史」に記述の同氏系図が、比企郡の某町において発見されたとあるが、この系図は比企郡小川町か、玉川村あたりに、同氏の一族もしくは親族が居住（住所不明）して居るので、おそらくその人達が所持していたものと思われる。ということは、近世初期、宿谷荘から同氏道重の一子、重右衛門重安が、大谷木、森田に分知（里人は森田宿谷氏、又はお代官と呼ぶ）したが、この森田宿谷氏から、江戸中期さらに二家、近くに分家がでているがそのうちの一家が、江戸末期に比企郡玉川郷辺へ移住していることが明らかになった。同家が分家の際、大谷木本同氏系図を筆写し所持していたものが、村本先生の云われる「日蓮教団全史」に記述の比企郡の某町において発見の同氏系図ではなかろうか？ 明治中期頃から森田宿谷氏の墓地が私の家の所有地となつて居り、昨年同氏直系の方から同墓地返還の依頼があり、墓地整備の折に同墓地内に分家墓地があることが明らかになった。現在年二、三回ほど墓参に見える。

大谷木本、葛貫本、ともに原本からの分写であると伝えられるし、この一家の移住地が比企郡玉川郷辺であることから何となくうなづける様な気もするが。明治初期、原本系図をめぐって、同氏一族の激しい確執が起り私の曾祖父も宿谷氏執事の家であったのでこの確執に巻き込まれているが、同氏の軍忠状〔合

戦の功績を書き上げ上申した文書」も同時に行方不明となっている。江戸初期の頃の同氏系図「葛貫本」をみると、「行勝 南方宿谷勘左衛門」とあるが、成木村（現青梅市、成木）に宿谷姓を名乗る家が数家あるが、勘左衛門行勝が、成木村に住しその子孫であるといわれる。又、浅羽宿谷氏の名績を継いだ、権左衛門重本の次男尹行は、おぢ尹宅の養子となり江戸宿谷氏を継ぎ、石高、百三十石にて、名を、左門尹行と改め、江戸幕府の旗本に取立られたと伝えられる。

前述、宿谷一門による系図をめぐっての確執を、宿谷家系図騒動と呼んでいる。

三、宿谷氏とまぼろしの名刀小狐丸の事

平安末期の頃、この地の在地土豪として土着した宿谷氏も、当時の土豪達がそうであるように、しだいに武門としての道を歩み始める様子が同系図をみるとよくうなづける。武門の家に欠くことのできない、家重代の郎党、武器類等、があるが、これに関する云い伝えも、しばしば耳にするものであるが、本町において、滝ノ入の大野氏の佩刀と伝えられる烏丸、平山の村田氏所持の一字の太刀等がその例である。

治承四年（一一八〇）、鎌倉殿の御家人となった宿谷氏にもその例がある。承久三年（一二二二）鎌倉政権と公家政権とが、正面武力衝突を起した、いわゆる「承久の乱」に、宿谷太郎重氏が戦功の恩賞として、時の執権、北條義時より三條小鍛治宗近作なる黄金作りの太刀、小狐丸を拝領した。後に、この太刀と、原本宿谷氏系図、日朗上人直筆と伝えられる、まんだら（後述）の三品を宿谷氏累代の重宝として明治初年まで、宿谷氏宗家で所持していたと語り伝えられている。この三條小鍛治宗近の小狐丸は周知の方も多いと思われるが、この宗近は、平安朝の頃、山城国、京三條に住み、三條小鍛治と称し、一条天皇より御剣を打つよう勅命を受け、京伏見稲荷にこもり祈願をこめたところ、白狐が現れて向う鎚をつとめ、名剣、小狐丸を作り上げることができた。「謡曲小鍛治」はじめ長唄、歌舞伎などによって広く知られているが、そういう伝説まで生れたほどの名匠であったと伝えられる。刀剣史上でも、伯耆安綱とともに、日本刀の始祖といわれている。宗近作なる太刀、しかも名物ともなっている小狐丸をいかに抜群の手柄があったとはいえ、これを宿谷氏が拝領するということは一概には信じがたい様な気がするが。ちなみに当時の有名な武将の佩刀をあげると、畠山重忠が古備前三平の一人高平を、富士の裾野の討人で有名な曾我兄弟のうち弟の十郎祐成が同じ三平の一人助平を、和田別当義盛がやはり三平の一人包平を、源義経が古備前友成を、最明寺入道時頼が、栗田口国綱の鬼丸を、それぞれ愛用していたといわれる。

宿谷氏の重宝といわれるこの黄金作りの太刀は、明治中期頃まで確実に実在していて現に私の祖父は経眼しているというし、先年、大谷木の山根神社本殿からこの太刀に関連ありと思われる木札が発見された。木札は、明治中期、宿谷の白山神社が合祀された際に、山根神社に移されたものであるが、それによると、木札の右に、相州鎌倉郷長谷、中央に、伏見稲荷大明神、左に、山城国三條住宗近と書かれているのを経眼している。木札の右の文は、宿谷氏の鎌倉での館趾であり、中央の文は前述の伏見稲荷の祈願であり、左は、宗近の在名を意味するものと思われる。とするとこの太刀が名高い、小狐丸であろうか？ あるいは、小狐丸でないにしても、宗近作の太刀であったのではなからうか。無銘であったか、在銘であるか不明であるが、在銘であれば、三條もしくは、宗近とあったらうから、後世、宿谷氏がこの太刀を、小狐丸と呼んだことも考えられなくもないが。長さ二尺六寸三分、生ぶ中心には、宿谷入道これを所持と、所持銘まであったと語り伝えられている。

明治中期、やはりこの太刀の所在をめぐって、宿谷氏一族の確執があり、これを里人は「小狐丸騒動」と呼んでいると聞く。宿谷氏一族と私の祖父以外に経眼したものも居らず、今もってその所在がようとして知られず、まさにまぼろしの名刀としてふさわしいものであるが、つい最近、宿谷入道これを所持という重要文化財に指定された太刀が実在していることを耳にしたので、もし実在であれば云い伝が裏付され

ることになる。

是も最近聞いた事であるが、小狐丸とは別に宿谷氏愛刀のことである。多分、宿谷氏の関係と思われるが、天正十一年（一五八三）四月、宿谷七郎左衛門尉が、賤ヶ岳の合戦の折に用いたという一口の太刀が本町に実在しているとの事である。この合戦で宿谷七郎左衛門尉は、秀吉麾下のいわゆる賤ヶ岳七本槍の一人、糟谷助右衛門に討取られているが、討死後どんな経路で本町にあったかつまびらかでない。

四、宿谷氏とまんだらの事

宿谷氏累代の重宝としてすでに、系図と、宗近の太刀のことを述べてきたが、ほかに、一幅のまんだらがある。同代の家伝によれば、このまんだらは、鎌倉幕府の寺社奉行であった宿谷左衛門尉光則が、日蓮上人法難の折、弟子の日朗上人を自邸の土牢にかくまい、日蓮の教に深く帰依し、日朗上人より拝領したもので、同上人の直筆とされている。現存していて、私も経眼しているが、すぼけて文字は明確には読みとれないが、例の南無妙法蓮華経と中央に書かれた独特の書体は実にすばらしいものである。日朗上人の直筆であるとすれば、日蓮宗の信者の人達には何としてもほしい物の一つと思われるが、宿谷氏と日蓮上人との関連が立証される重要な史料でもある。しかし、これ又、系図、宗近の太刀同様またしても、宿谷一族の確執があったと聞く。世に云う「おまんだら騒動」である。

五、宿谷氏と七騎の事

古来から武門の家にはすぐれた郎党が養なわれているが、例を上るまでもないが、武蔵にあつては、畠山氏四天王、大蔵源氏（木曾義仲）七騎、太田十六騎等、宿谷氏にあつても、宿谷七騎の面々として語り伝えられている。新篇武蔵風土記稿には「宿谷太郎行俊なるもの隣村葛貫に住して当村を開発」とあるが、当時、葛貫は推測では、武蔵一の豪族であつた秩父平氏の領有地ではなかつたかと思われるが、ということとは宿谷太郎行俊なるものの祖父行重が、秩父重綱の養子となつた事に起因がありそうである。この秩父平氏の領有地の一部を分けあたえられ、ここに住み、地つづきのおそらく無住に近い荒地を何人かの協力を得て開拓、小さいながらも一つの荘の主になり、当時の協力者達が、後世、宿谷七騎の面々といわれる人々と推測される。開拓当時、宿谷氏と苦楽を共にした、七騎の面々は、主人と郎党という、作家、永井路子氏の言を借りれば、平安朝期末より新しい風潮として広がりつつあつた「御恩と奉公」という固いきずなに結ばれ、累代の郎党として、宿谷氏を大きく成長させた原動力ではなかつたらうか。その七騎の面々とは、筆頭は、山の口七郎、次に、福田の太郎、大河戸三郎、弓削田の次郎、片瀬の兵太夫、小谷野の和藤太、荻野の十太の面々であるといわれる。

筆頭、山の口七郎……祖先で後述。

福田の太郎……道成と号したといわれる。七騎の内最も武勇にすぐれ、宿谷氏出陣の折には常に先頭にあつたといわれる。後世、宿谷氏が分派した時、福田氏の直系は、浅羽宿谷氏の家老となり一族の一人が大谷木地内に住し、近世初期、宿谷道重の一子、重勝を葛貫古屋敷へ分家する際、旧臣であることから、葛貫宿谷氏の執事として取立てられ明治初年まで世襲してきたと伝えられる。

大河戸三郎……宿谷の谷の奥に物見山と呼ばれる視界のよい山があるが、宿谷氏は常にこの山に物見の兵を配置して自領地の守りを固めたといわれ、大河戸氏はこの山で物見の役を世襲してきたという。居住地も七騎の内最も近い所にある。

弓削田の次郎……姓名を伝えるのみであるが、宿谷の滝の奥に大正の頃まで水車を営んでいた弓削田を名乗る家が一家あつたが（現在日高町に移住）、あるいはこの家が、弓削田の次郎の子孫でもあろうか。

片瀬兵太夫……片瀬氏の前身は熊野別当の修験者で、道栄と号し、葛貫住吉四所神社の行者であつたと

いわれているが、思うに、宿谷氏がこの地を開発に着手した当時、住吉四所神社に住し開拓に協力、以後宿谷氏の郎党になったものとみられる。現在、大谷木地内片瀬の地に鈴木姓を名乗っている家が二家あるが同家の墓地内の一隅に自然石が一つ建っているが（文字は不明）同家の話によると兵太夫道榮の墓と伝えられている。片瀬氏が鈴木姓に改姓した理由については、多くの書物が語るごとく、熊野別当は、鈴木姓を名乗ったことが知られているので、祖先が熊野別当の出自であるので、これにちなんで鈴木姓に改姓したものとみられるが、改姓の時期は近世初期の事であろうか。

小谷野の和藤太……小谷野氏も姓名を伝えるだけである。しかし、大谷木地内に、小谷野氏を名乗る一家があるが、この家が、小谷野の和藤太の子孫でもあろうか。森田宿谷氏の墓石を見ると必ず同氏の名があるところを見ると、関連があるのではないかとも思われるが今のところつまびらかでない。

荻野の十太……やはり姓名を云い伝えるほかに何の手がかりもないが、宿谷の地から近い、日高市大寺〔現・日高市山根〕に同氏を名乗る家が数家あるが、何ともつまびらかでない。

七騎のほかに町史、系図をみると、宿谷氏の家臣に、村木右近なる人物が居るが、村木氏に関しては、あゆみ三号に記述の様な云い伝があるだけで私の知るかぎりでは、宿谷氏とあまり関連がなさそうである〔附一章 南北朝期の宝篋印塔の事〕を参照。しかし、宿谷氏の氏神が、住吉四所神社で菩提寺は永源寺であるし、村木氏も、氏神、菩提寺ともに同じであるので、あるいは七騎の面々以後、宿谷氏の郎党となつたとも考えられるが、町史や系図にみる宿谷氏の数々の武功もこれらの人々の奮戦によるところが多いのではなからうか。

六、宿谷氏と日蓮上人の事

日蓮上人といえ、ただちに、立正安国論が頭にうかぶほど有名であるが、日蓮は、立正安国論を、文応元年（一二六〇）七月十六日、当時の幕府最高権力者である、最明寺入道時頼に献進、国難来たるを予言したが、その役目をはたしたのが時の寺社奉行、宿谷左衛門尉光則であつたと地元では伝えている。参考までに、小川雪夫著、「日蓮、その生涯と足跡」という一書の一部を引用すると、P 34、第一面、国家諫曉〔弾圧を恐れず権力者に対して意見すること〕として寺社奉行、宿屋光則最信入道を介し時頼に献進した。P 42、まず現政をゆがめて居る邪の排除をせよと、当時の権力者たる、北條時頼、同時宗、宿屋左衛門尉光則、平左衛門頼綱、北條弥源太、建長寺道経、極楽寺良観、大伝殿別当、寿福寺、浄光明寺、多宝寺、長楽寺、の各山主等、合計十一通の警告状云々、P 44、時宗（北條）は宿屋光則を介して「北條時宗状」をみた時……以上の引用文の宿谷氏は、いづれも光則となっている。

町史では、光則の父、左衛門尉行時最信ではなかったらうかと記述されているが、決して町史に反論するつもりはないが、地元の一説では前述の、日蓮法難の折、弟子日朗上人を自邸の土牢にかくまい、日蓮に帰依したため当時の権力者達から責任を問われ、寺社奉行職を解かれ、一族郎党達と鎌倉を逃れ宿谷荘に帰り武備を固めたという。この時、日蓮上人より自作の、不動明王像を拝領持帰り宿谷の滝に一堂を建立、同氏累代の守護仏として伝えたと聞く。宿谷氏一族はこの不動明王像を「波きり不動」と呼んで崇めていたというが、これは、日蓮上人、佐渡流配の折の逸話にちなんで、「波きり不動」と呼ばれたのではないか？ いづれにしても町史と、云い伝えで矛盾するが今後の研究が望まれよう。

七、宿谷氏と遺跡の事

宿谷氏館跡……宿谷荘を開発した同氏も、多くの在地主豪がそうであるように、本領地防衛のため館をきざいたことが推測される。葛貫地区西の前、縄文時代の西の前遺跡（通称向ふ山）と呼ばれる所である。面積約九百坪、背面と東面が約四間ほどの崖となり水堀が廻っている（防禦の役目）。南面にわずかでは

あるが空堀の趾を残している。西面は現在道路となりその西に、いわゆる鎌倉街道と呼ばれる幅六尺ほどの古径が宿谷方面に通じている。館跡は二分され西面寄が一段低くなって居りおそらく、鎌倉街道寄がこの館跡の大手であったろう。先年この館跡に牧場建設の際大手近くで古井戸を発見したが、同館跡の水源ではなかるうか。中世初期、土豪館跡の様式を残して居るので、同氏の開発が一応完了した時点で、前述七騎の面々の協力によってきずかれたものであろう。しかし中世館跡には必ずといってよいほど堀ノ内、堀込、堀内、門田等の地名が残って居るものだがこの館跡には前出のような地名は聞かず、宿谷氏館跡のみ伝える。

馬場趾……この館跡のすぐ東に広い平地があるが、宿谷氏馬場趾と伝えられている。おそらく、同氏の武技訓練の場として武力を培った場所であろう。当然、七騎の面々もここで武を練り、気を養い、武蔵野の大地に、みちのくの山野に、はたまた、王道の地に荒馬を駆って、阪東武者の真髓を発揮したことであろう。

物見山……前述、七騎の一人、大河戸氏を物見の役として配置して居り、後世、物見山と呼ばれる様になったと聞く。又、一説では、左衛門尉光則が鎌倉を逃れ本領地へ隠棲の時、討手にそなえて物見の兵を配置したとも伝える。

八、宿谷氏と六角塔婆の事

埼玉県指定の六角塔婆と宿谷氏の関連について一つだけ語り伝えられている。六角塔婆は現在地に移される前は今の岩沢から宿谷に通じる道路の上の見晴しのよい山に建立されていたという。現在地に移す際、旧所在地に同氏の軍資金をかくし、六角塔婆の一枚をふたと目印がわりに使用、一枚欠けたまま現在地に移したと伝える。やはり明治の頃里人達が発掘をこころみたが発見されなかったと聞いている。

城山……別名を、大崖城と呼ぶ、その理由は城の前面を高麗川が流れ大きな断崖となつていたので、大きな崖すなわち大崖と呼ばれ城山の別名（築城当時は本名であったかもしれない）となつたものであろう。城は遺構からみて室町初期か中期の築城ではなかるうか。前面を高麗川と断崖を利用、背面を土塁と空堀で各曲輪をかこみ地形を利用した、平山城でいわゆる同時代特有の「搔上げの城」方式の様である。平時は、城下の永源寺の館に住し、一朝有事の際に、家の子郎党達とたてこもつた、いわば、宿谷氏の詰の城であらう。

数馬屋敷……西の前館跡の東北方中屋敷と呼ぶ所に浅羽宿谷氏の古屋敷があったと聞く。大崖城へ移る前の屋敷であったかもしれない。東西四十四間、南北二十五間の屋敷は、北面が高さ約五間ほどの崖で食違いの趾らしい場所もある。東西南の三方は、高さ六尺の土塁と九尺の空堀がめぐつていたという。いわゆる構え堀屋敷といわれる典型的なものであったろう。この構え堀は、中世土豪の館様式を残して明治初期までその原形をとどめていたと伝えられている。近世初期、この古屋敷に、宿谷道重の一人重勝が分家、幕末に重勝の子孫、数馬は甲源一刀流の使い手として名をはせたが、里人は数馬屋敷と呼んでいたと聞く（十章六参照）。同氏系図葛貫本重勝について、葛貫控屋敷云々はこの屋敷を指すものと思われる。

薬王寺……葛貫地内矢倉に、薬王寺という天台の一寺があるが、中世末期、宿谷能登守（本重のことか）開基と伝えるのみである。



城山遠望



六角塔婆

九、宿谷氏と畠山重忠の事

葛貫地内県道ぞい、葛川のほとりに古い小さな山王社が建立されているが（里人は山王様と呼ぶ）、宿谷氏が宿谷荘開発の成就を願って、萩日吉神社（ときがわ町）を勧進したものであるという。祭礼も萩日吉神社と同じ一月十五日で戦前までは屋台店などが出てにぎやかであった。山王社の後に大きな桜の古木が一本あるが伝えでは、秩父平氏の一族、河越二郎太夫重経の子能隆が嫡子太郎重頼に家督をゆずりこの地に隠棲し葛貫別当と称したといわれるが、この能隆の墓であると伝えられる（十章七参照）。これに信がおけるとすれば、

河越氏の勢力下である河越三十三郷の内に葛貫がふくまれて居るので、おそらく平安朝期から秩父平氏の所領地であり河越氏がこれを引継ぎ能隆は自領

内へ隠棲したものとみられる。隠棲場所のいい伝はないが、推測すれば県道東に古い観音堂があったと聞くので、その辺ではなからうか？ 宿谷氏も系図に示すごとく、行俊の祖父行重は秩父氏の養子となっているが、このことは、当時の豪族達がそうであるように、秩父氏も勢力の拡大を計るべく在地土豪を自己の麾下におくべき策として児玉党と形式的な養子縁組をはかり、未開発の自領内を開発させ土地名を名乗らせ自己の勢力を培ったものとみられる。一方、宿谷氏も武蔵きつての大豪族、秩父氏の養子になることによって、自己の保身と自領地（本領地）確保のメリットが得られたもので、そこには宿谷氏と七騎の面々との結びつき同様に「御恩と奉公」という精神的な鉄のきづなが培かれていたとみられる。

さて、本題がら外れてしまった様だが、前述山王社前の小径は宿谷氏館跡西に通じる鎌倉街道の一部である。治承四年（一一八〇）八月、伊豆に旗上した、源頼朝は石橋山の合戦に敗れると安房に逃れ千葉氏に迎えられて二ヶ月後の十月、安房、上総の軍勢を引つれ、長井の渡りで畠山重忠を筆頭とする武蔵武士の帰順に接したといわれるが、このとき一族麾下の武蔵武士をしたがえ長井の渡しに向う畠山重忠を、家の子郎党とともにこの山王社頭において出迎、重忠の陣に加わったと伝えられている。

又、この折重忠は同社に田地二反歩を寄進、長く宿谷氏が継ぎ伝えたと聞くが、いづれの土地か定かでないが近くに「神名」という地名が残っているが、このあたりであろうか。いい伝えに信がおければ、武蔵武士の棟領たる重忠が鎌倉本街道からわざわざ寄道までして宿谷氏の出迎を受けたことは何を意味するのであろうか。あんずるに、時の同氏当主は重堯で曾祖父が形式的にもせよ秩父氏の養子となっていた事又、同氏そのものがある程度実力を持ち始めていたことを意味するのではなからうか。長井の渡で帰順をかけた重忠は鎌倉入の先陣を命じられるが、この先陣には当然重堯と七騎の面々も居たことは想像にかたくない。思えばこの機を境に重忠を始め武蔵武士の新しい道が開けた事になるが、ちなみにこの時、畠山庄司重忠は若冠十七才の若武者であったといわれる。

元久二年（一二〇五）、幕府の実力者である、北條氏の内訌「内紛」による陰謀に巻き込まれた重忠は、武蔵二俣川において討手の愛甲三郎季隆の放つ矢に兜のひさしを射抜かれ一族郎党と二俣川の露と消えたが、この時重忠に従った百三十四騎の内に同氏一族の一人が参陣していたと伝えるが、姓名、郎党人数、討死の有無等一切不明である。（「五章 二俣川合戦と宿谷氏の事」参照）

十、宿谷氏と軍忠状の事

宿谷氏に関する古文書は明治中期頃まで確実に残っていた（祖父が経眼している）と聞いているが、中でも左馬頭より、四郎右衛門尉重頼に賜った軍忠状は前述同氏の重宝三品なみのあつかいであったが、同氏一族確執の折、系図とともに行方不明となったと聞く。祖父の経眼している軍忠状は、「今武州表苦林



山王社

野」云々の書出しとなっていたといわれ、世にいう貞治二年（一三六三）に行われたいわゆる苦林野の合戦を指すものである。

左馬頭とは、足利基氏であろうか。現存すれば同氏の参陣が裏付けられるが、実は最近森田宿谷氏系の方の話を聞いてそれらしい古文書が現存しているとのことである。同系の方が鎌倉に住みその方が祖先の古文書を所持し功名書なる一書を秘蔵しているとのことであるが、しかしこれが軍忠状であるかは不明である。

十一、宿谷氏と我が家の事

我が家の祖先は前述七騎筆頭の山の口七郎で、道意と号し宿谷荘近くの山口に住すと伝えられるが、私の家の墓地に、地蔵をきざみその右に道意禪定門とわずかに読みとれ左に年号がみえるが判読できない祖先の供養塔があるので確かなことであろう。宿谷氏の同荘開発の頭初からの協力者で武門の道を歩み始めると七騎の人々と同氏の武力の中核をなしていたのであるが、一方、同氏累代の執事職（近世大名でいえば国家老的な職）をも兼て宿谷氏一切を取りしきり一門の末にまで加えられているから、実際にはあまり合戦には参陣せず、本領地である宿谷荘の管理にあたったものとみられる。この執事職は明治初年まで我が家の世襲であった。我が家の嫡子は代々五才になると同氏に引取られ元服まで（十六才）養育されたと伝えるが、現に私の祖父なども五才で引取られ十三才迄同氏の手により養育されているが、この間に宿谷氏の執事としての教育を受けたものとみられる。

近世初期、宿谷道重の一子重安が大谷木地内森田（森田宿谷氏又はお代官と里人は呼ぶ）に分家する際、我が家も、森田宿谷氏とともに居を現住地に移し両家の執事職を世襲し、旧地を忘れぬため現姓に改姓したという。明治中期の我が家の土地台帳を見ると、永年の功績により宿谷家より硯岩（宿谷の地名）、山林七反歩を拝領とある。思えば、児玉党の流れを汲み、武門のほまれ高く、しかも祖先は鎌倉幕府の寺社奉行の要職までつとめ繁栄を極めた名族、宿谷氏も明治末期迄には四家が古地を去っている。その内の一家森田宿谷氏が古地を去るに当って、我が家で同氏相伝の什器類、土地等一切はては墓地に至るまで引受ていることは同氏と我が家の関連が実に八世紀近くにも及ぶ深いものであったことがうかがい知られるのである。したがって宿谷氏にかゝわる事績は同氏一族以外は我が家が最もよく知る所以である。栄枯盛衰人の世のならないとはいいながら歴史の長さ、重さをあらためて思い知らされることである。

十二、あと書きの事

以上、はしがきで述べたごとく宿谷氏のいい伝えを主に若干の拙い私考を加味しながら、宿谷氏の賦と題して記述してきたがもちろんこれで同氏の全てではないし、祖父や同氏の祖母から伝え聞いたことも三十年も前の事であるので忘れた事があるかもしれないし、地元の古老達に問えばあるいはまだまだ云い伝が残されているかもしれない。思い出すままの記述と拙い私考であるので当を得て居るのかどうかいささか心細いかぎりであるが……

思えば、少年の頃冬場祖父と山仕事に出かけ昼休にこれらの話を聞き、帰りには前述の遺跡に立寄り説明を聞き、雨の日は宿谷氏の祖母とコタツに入り、さつま芋をほうばりながら心をときめかせて聞いたものである。長々と本町の名族、宿谷氏の事績に関して述べてきたが各位の宿谷氏に対する理解の一助となれば望外のよろこびである。

昭和五十四己未年正月二十五日 誌

